

だった。兵隊の顔は、もう汗も出ず、塩が噴き、ザラザラの顔ばかりだ。眼ばかりが異様に光っている。暑さを避け、日中は谷間の山中に休む。谷間の安全な場所ですぐ小休止だ。

以上、作戦行軍の状況をよく描写している。

その後、岩田氏は負傷している。

私は、その頃は、野戦病院の衛生兵でなく、第六十五師団（専部隊）輜重隊の隊付衛生兵であったから、野戦での様子はまさに「その通り」であった。

下士候で頑張る

南支独立大隊

福岡県 八山 千萬多

父は明治三十七（一九〇四）、八年の戦役、日露戦争で、功七級金鷄勲章を賜り、その時の隊長

の名、片倉千萬喜の名を受けて、私に「千萬多」と名付けられたという。兄弟は男のみ九人で、その七男だったので、父は「お前達は軍隊へ行け」と言っていた。親としては、男の児を沢山持ったので「国の為に軍人になれ」と言っていたのであろう。

生家は代々農業で、農地が多くなければ生計が立てられぬので、農地を開拓した。当時福岡には「土地利用」のための補助金があり、それを受けて現在では、組合員二十人で約二〇町歩を経営している。そのうち県と町から二分の一、自己資本二分の一で、大農経営となっている。組合は、昭和二十五（一九五〇）年に始めたが、その前は個人経営だったので、一家は皆働いた。

私は大正十一（一九二二）年十一月一日生まれなので、昭和十八年四月十日、小倉の西部第四十六部隊に入営し、約二カ月教育を受け、南支派遣軍の要員として外地に出発、昭和十八年六月、広

東省の汕頭港に上陸した。その時は、潮州に部隊本部があり、そこへ配属となり、私の第三中隊は「フウヨウ」と言う小部落に駐屯していて、そこで本格的な初年兵教育を受けていた。

その頃、仲秋作戦があり、敵が攻めて来て中隊本部が包囲され、私はその時歩哨に立っていた。敵兵は若い兵隊（少年兵？）で、素足であり夜間行動は敏感だったが、やっと追いかけることができた。私にとっては初陣であり夢中で応戦したが、部隊主力は各陣地に応援に行っていたので我が兵力は少なかった。

こちらには重機関銃はあったが、私は小銃班だった。その時、独立歩兵第九十七大隊は、四個中隊編成であったが、編成はその後、重火器大隊、重機関銃、歩兵砲、九二式大隊砲が補充され、兵装備は幾分強化された。しかし、小さい大隊砲の砲身だけで六〇キロあり、主として駄載で行動していた。

私は下士官教育のため学校へ行っていたが、

帰って歩兵砲の分隊長を命ぜられた。その後、部隊は、独立混成旅団から、第一三〇師団に編成替えし、重装備となり、前に述べた敵襲を受けた時の倍になり、後に、広東方面に転進となり、東莞へ行ったり、潮汕地区の主力となった。

部隊はその後、羊蟹作戦においては戦死八六人、負傷九一人。仲秋作戦、戦死九三人、負傷七五人。昭和十九暮作戦、同二十冬作戦、約三〇人。西炉討伐作戦、四三七人（内玉碎一一個小隊全滅、市内引き廻され死刑になる一中国の市民への見せしめ）。

下士官候補者学校では、私は代表となり、大隊長に申告しました。教育の内容は酷しく、実兵指揮や学科も随分やった。十カ月間広い演習場で、相当苦しい教育を受けました。戦後、連合軍から日本の下士官は優秀であったと言われたが、それを裏付けるような教育内容であった。

原隊へ復帰したのは、昭和十九年の二月頃であったと思う。従って、昭和十八年九月に入隊

し、仲秋作戦には参加したが、羊蟹作戦には出ていない。樟林作戦は昭和十八年十二月であり、東莞に移動したのは昭和十九年であった。

昭和十九年四月から八月まで、湘桂作戦に参加（下士官候補者隊より帰隊した）した。その頃は兵長で分隊長、九二式大隊砲の分隊長となり、分隊長として出発。一時、澳東地区を警備する。

部隊全員装備をして東莞を出発、公路を出発したら敵襲があり、三十〜四十人で攻めて来た。大隊砲を、一〇〇〇メートルの時発射し、第二次発射は八〇〇メートルで命中、敵の集団の塊の中心部で多数の死傷者を出し、致命的な損害を与えたので、敵は攻めて来なくなった。

分隊長としての初陣での戦果、大隊長よりおほめの言葉を頂いた。大殊勲であった。第一回目、一〇〇〇メートルでは遠すぎ、第二発の八〇〇メートルで見事命中だった。作戦には、歩兵一個小隊が着いて来てくれたが、数人戦死している。

敵は第一八六連（第一八七連（中隊）で、大損害を受けたので散り散りになり、その後敵の攻撃はピタリと止まった。東莞は派遣大隊で、援護の松本小隊と、私の歩兵砲の隊とは同宿した。東莞では警備になり、湘桂作戦の後衛となり東莞に駐屯していた。

昭和二十年四月十日、大隊長は、三宮善人大尉となり、五月五日、軍令甲第六五号により第一三〇師団が臨時編成され普寧を出発、五月二十日、独立歩兵第九一七大隊編成完結（第一三〇師団中の）、大隊本部、歩兵四個中隊、歩兵砲一個中隊、通信一個中隊と編成は増えた。

五月二十一日〜九月二十日、広東付近の警備……。東莞の新村に駐屯（歩兵一個小隊と歩兵砲隊）。

停戦時、住民の方が情報を早く知ったのであろう。「日本馬鹿野郎！」等との罵声を浴びた。

「リーペン、バカヤロー！」等と言われたが、喧嘩する訳にもいかぬ。降伏した以上悔しいが我慢するより仕方が無かった。食料は終戦まであったが、中国軍兵士に日本軍の食物をやると「謝々」と言って喜んでいた。向こうは食料難であったからである。

武装解除はされず、兵器は最後まで持っていた。帰還直前に蒋介石軍に渡した。当時、潮汕・東莞地区では、国共紛争は余り聞いていなかった。蒋介石軍の要請で、共産軍（新四軍）対戦について要請は受けたが、直接の戦争はしていない。

軍馬を蔣軍に引き渡したが、我々日本軍は馬を大事にしていた。砲の分解搬送では馬を使った。砲身、脚、防じんは馬に駄載した。大隊砲としての思い出は、東莞付近で、敵集団（三〇四〇〇人）に命中させたのが大隊砲としては殊勲であったが、兵器引渡しの時は、あの時のことを思いだし感無量であった。

地域住民との仲では、余り摩擦は無かったから、問題は無かったと思う。

昭和二十年八月から昭和二十一年四月までの現地の状況、兵舎での生活。

戦犯容疑者の五〇六人は逮捕されていて、捕虜No.をつけられ、番号でチェックされていた。戦犯の理由は「〇〇作戦で、部落を放火したり、住民を殺したりした」のであったが、濡れ衣を着せられ、誤って戦犯になった者もいたと聞く。勝てば官軍、負ければ賊軍ということもあったと思う。

しかし、主として戦犯は指揮官以上で、その書類を、米・蔣軍も一緒にチェックしていて、乗船時も帰還を止められ、逮捕された者があった。後に新聞で、その結果（絞首刑等）も出ていた。終戦後、日本に帰って、戦友会をしているが、絞首刑になった人で可哀想な人もいたと話し合った。

昭和二十一年三月二十三日、内地帰還が決まり、広東出帆、鹿児島上陸、三八三人、浦賀上

陸、六二〇人、計一〇〇三人。

復員列車で福岡、久留米―西鉄駅まで歩いて、西鉄よりミツマまでは蒸気機関車で帰った。

家に帰って、兄弟の五人は軍人で、皆帰って来たが、その中で私は昭和二十一年四月の帰還だったので遅い方であった。父母はその時は丈夫だった。家も焼けずに大丈夫であった。帰還後は農業をやり、昭和二十三年に八山家の養子になり、農地を買い求めて、現在一町八反、米麦耕作であるから、子供は勤め人となり町の農協に勤め、子供夫婦と孫五人で農業をしている。

農業年金受給者協会の会長を四年間、その後、町の会長をしている。いろいろの名誉職等、健康のためになる公務をしている。県・町の会長も十、二十三年勤めている。

痛感することは、戦争の時代は産めよ、増やせよ、今は子供を持たぬ者も多い。これは、日本の将来によくないことと心配している。

湘桂作戦に

苦闘した兵たち

福島県 若林 保

歩兵第六十五連隊は、明治四十一年（一九〇八）年六月二十六日、若松新兵営に入り、大正十四年（一九二五）年一月二十七日軍備縮小により廃止され、昭和十二年（一九三七）年九月十八日、両角大佐を長として再編成された。両角・立花・桜井・伊藤・服部と隊長変遷を歩み、上海戦以来、湘桂反転作戦に至るまで四八八一人の戦死者を出した。

私は桜井部隊の時に入隊、伊藤・服部と三代にわたり従軍、終戦を迎える。この間、昭和十七年十二月一日より再び祖国の土を踏んだ昭和二十一年六月二十三日までの五カ年にわたる丸三年七カ月、祖国を離れて戦場にて青春を過ごした。